

唱和の位置

——落窪物語の構造と和歌——

山本 登朗

一

落窪物語の巻之三、男君すなわち衛門督による報復もようやく終わりに近づいたころ、三条邸を占拠した男君から渡された鏡の箱とそこに添えられた和歌によって、かつての落窪の君が衛門督の妻になつてゐることをようやく知つた中納言家の人々は、さまざまな反応を示す。中納言と長男の越前守は、衛門督の招きを受けていそいそと三条邸に出かけ、女君とも再会し、豪華な饗応を受けて帰宅するが、その越前守から、最近まで自分たちに仕えていた多くの侍女が今は衛門督の邸で女君に仕えていることを聞いた三の君と四の君は、次のように互いに身の上を慨嘆しながら「うち泣き」、和歌を唱和する。(以下、落窪物語本文は、吉田幸一氏によって私家版『古典聚英』4に影印された九条家本により、一部を他本によって補う。また、表記等を適宜改める。)

「世の中はあはれなるものにこそありけれ。かの君の落窪に住

みて部屋にこもり給ひし時は、まろらにまさりて人使ひ取られむとやは思ひし。父母のおほさむこと、はづかしくもあるかな。なぞや、尼にやなりなまし」とうち語らひて三の君泣けば、四の君もうち泣きて、「そがはづかしきこと。かく憂き宿世も知りたまはで、上の懸隔におほしかしづきを、いかに人思ひあはせむ。まろら、この頃、憂きこと出で来にしをりぞ、尼になり侍りなむと思ひ侍りしを、いつしかと身のなり侍りにしかば、えならで、これ出で来にしのちより、はた人の心なりけること。これものの心知るまで見むとおほえなりて、いままで侍りつること」。二人うち語らひて、うち泣きて、四の君、

人のうへと昔は見しをあり経れば今は我身ぞ憂き世なりける

三の君、「げに」とて、

憂きことの淵瀬に変はる世の中はあすかの川のこちこそすれ

物語はこの後、「言ひ明かし給へるつとめて」という語句をはさんで翌日の事件へと続いてゆくが、二人が夜を徹して「言ひ明かし」たであろうさまざまな慨嘆の言葉は、右に引用した以外には物語には示されていない。この場面は、あくまでも右のように、和歌の唱和によってしめくくられる形に意図的に構成され、ここに置かれて見られるのである。ひとつの場面を和歌でしめくくるといふ、歌物語にも通じる構成は、ここでもそれなりに効果的であり、「物語における和歌の役割を巧みに用いている」(三谷栄一「日本古典文学全集・落窪物語」頭注)という指摘もなるほどと

うなずかれるところである。

しかしながら、この一対の唱和歌は、落窪物語の中であって、いささか特異な点を有している。何よりもまず注意されるのは、この唱和歌が、三の君・四の君という、物語の主人公である女君や男君以外の二人によって詠まれているということである。後述もするようには、この唱和歌に至るまでの落窪物語の和歌のほとんどすべては、主人公である女君・男君によって詠まれたものであった。ところがここに至って、主人公以外の人物が、主人公の登場しないまったく別の場面で互いに歌を詠み交わし、その歌が、まるで主人公の心情を述べたものであるかのように、ひとつの場面をしめくくる位置に掲げられている。これはなぜなのだろうか。そしてまた、

このような特異な唱和歌の存在は、この物語全体の中でどのような意味を持っているのだろうか。

「落窪物語」の和歌を全体的に考察した論考として神尾暢子氏「落窪和歌の表現機能」(『学大国文』三一号・昭和六三年二月)があるが、そこではこの唱和歌の問題は特にふれられていない。他方、篠原昭二氏「物語歌と物語の型と源氏物語」(『国文白百合』創刊号・昭和四五年三月)には、すでにこの唱和歌をめぐる問題の指摘があり、若干の考察も示されていて貴重であるが、なお考えられなければならぬことがらも残されているように思われる。以下、これら先学の御論考にも導かれつつ、私なりの観点からあらためて落窪物語の和歌を概観し、この唱和歌の問題を考えてみたい。

二

落窪物語には七十首あまりの和歌が含まれており、その数はかならずしも少ないとは言えない。しかしながらたとえば、女君が監禁される原因となった手紙紛失事件や、男君による報復が語られる清水詣で・賀茂祭の各事件など、物語の筋の根幹をなすいくつかの事件は、長大な叙述を持ちながら一首の歌もその中に交えることなく語り続けられている。落窪物語の表現は、むしろ、巧みな会話文を多く含んだ散文による、事件展開のスリリングな叙述に特徴があり、

そこには、たとえば竹取物語に見られるような、物語のひとつひとつの部分と和歌によってしめくくってゆく叙述の形（山本登朗「二通の遺書―竹取物語における和歌と会話―」『ことばとことのは』）

第八集・平成三年十二月参照）は、ほとんど見られることがない。

七十首あまり見られる和歌も、そのほとんどは女君と男君の間に交わされた贈答歌であり、手紙の形でやりとりされたものも含めて、その多くは会話文に準じるような形で物語の筋の進展のなかに挿入されている。これは、落窪物語がこの二人の恋と結婚の過程を一方の主題として語り続けてゆくものである以上、その内容から必然的にもたらされた、いわば当然の現象であると考えられる。落窪物語の表現の中で和歌のはたしている機能は、一見かならずしもそれほど大きなものではないようにも見うけられるのである。

しかしながら、そのような中であつて注目されるのは、物語中にわずかに六首ではあるがことさらに掲げられている、次のような独詠歌の存在である。引用部からもうかがわれるように、これらの独詠歌が含まれている部分では、物語の叙述は、第四首目の歌の場合を除いて、それらの和歌によっていったんしめくくられるという、歌物語にも通じるような形を取っており、他の贈答歌の場合とはいささか異なつた和歌の機能を、それらの歌は有しているように見うけられる。

① やうやうもの思ひ知るまに、世の中のあはれに心憂きをのみおはされければ、かくのみぞうち嘆く。

日に添へて憂さのみまさる世の中に心尽くしの身をいかに
せむ

② 落窪の君、ましていとまなく苦しきことまさる。若くめでたき人は多く、かやうのまめわざする人や少なりけむ、あなづりやすく、いとわびしければ、うち泣きて縫ふまに、

世の中にかであらじと思へどもかなはぬものは憂き身なりけり

③ 八月ついたちごろなるべし。君ひとり臥して、いも寝られぬまに、「母君、我を迎へ給へ。いとわびし」と言ひつつ、

我につゆあはれをかけたちかへりともにを消えよ憂き離れなむ
心なぐさめに、いとかひなし。

④ 女君、なほ寝入らねば、琴を臥しながらまさぐりつつ、

なべて世の憂くなる時は身隠さむいはほの中のすみか求め
て

と言ひて、とみに寝入るまじければ、また人はなかりつと思ひて、格子を木の端にていとよう放ちて、押し上げて入りぬるに、いと恐ろしくて起き上がるほどに、ふと寄りて捕へ給ふ。

⑤三日の夜、御装束は、ものよくし給ふとて、この殿になむ奉り給ひければ、女君、急ぎ染め、裁ち縫ひし給ふにも、むかし思ひ出でられてあはれなれば、

着る人の変はらぬ身には唐衣たち離れにしをりぞ忘れぬ

とぞ言はれ給ひける。

⑥我身の幸ひあらましかば、かくうち続きでありき給はましも、

こよなきほどならでいかによからまし、と思ふに、我身のいと

心憂くて、人知れずうち泣きて、

思ひ出づやと見れば人はつれなくて心弱きは我身なりけり

と人知れず言はる。

多く歌物語にも通じる形で、その部分をしめくくる位置に掲げられてこれらの独詠歌は、心中思惟の言葉などとは異なつた、より深いところから、登場人物の心中の嘆きを読者にむかつて投げかけてくる。読者は、これらの歌を読みながら、無意識のうちに自身自身の意識を独詠歌の作者の意識に重ね合わせ、彼らの嘆きを自分の嘆きとして嘆くことになる。和歌という文学形態が本来持っている、読者を詠作者の立場に一体化させるという機能が、これら物語中の独詠歌の部分では十二分に發揮されているのである。

右の六首のうち、物語の冒頭に集中的に掲げられている女君の独詠歌三首について、篠原昭二氏は前掲論文の中で、「不遇述懐の独

詠が主人公の歌として、物語の冒頭に偏ること」が多く、そこにひとつの「物語の型」を見出だすことができることを、他の物語の例をも挙げつつ指摘された。「日に添へて憂さのみまさる」などと、わが身の不遇を繰り返し嘆き、「世の中にかであらじ」と死への願望を述べ、「たちかへり共にを消えよ」と、亡き実母にその願いを訴えるこれら三首の独詠歌によって、読者は、不遇を嘆く主人公の心情を自分自身の心情のように実感する。そして、主人公の嘆きを共感することによって物語の内部に引き込まれた読者は、やがて物語の世界を、主人公とともに、主人公に寄り添うように歩みはじめるのである。篠原氏が見出された、冒頭部に主人公の不遇述懐の独詠歌を掲げるといふ「物語の型」は、主人公が誰であるかを明示するとともに、その主人公の不遇という、物語世界が当初に抱えている問題を、外面的状況としてではなく、内側から読者に訴えるために多用されているとすることができよう。単なる説話の型とは異なつた、心情に重きを置く物語文学の冒頭の叙述のありかたとして、それはまことにふさわしい「型」であつたと言つてよい。

それら冒頭の独詠三首の後、物語には、男君から女君に贈られた懸想の歌六首が矢継ぎばやに示されており、男君の熱心な求婚ぶりがそこからもうかがわれるが、それらに続いて、冒頭の三首と同じように女君が身の不遇を述懐した四首目の独詠歌である「なべて世

の」の一首が物語中に掲げられている。さきの三首と内容的にほとんど変わらないこの歌は、しかしながら物語中の独詠歌の中でただ一首、その部分のしめくりの位置に置かれてはおらず、物語の叙述は歌をはさんでさらに後へと連続的に展開している。それは、本来は女君によって「琴を臥しながらまさぐりつつ」独詠されたはずのこの歌が、たまたま女君を「かいばみ」していた男君に聞かれてしまい、その結果もはや独詠歌ではなくなってしまうからなのである。本来独詠されたこの歌が結果的に一種の贈答歌の機能を果たしていることは、この歌を聞いてすぐに部屋に侵入し女君を

「抱きこめ」た男君が、さきの歌の「いはほの中のみすみか求めて」という下の句をふまえてそれに答えた「いはほの中求めて奉らむ、とてこそ」という言葉を女君に言いかけていることから明瞭にうかがわれるところである。これまで男君からの一方的懸想の段階にとどまっていた二人の関係が、具体的な男女関係にまで発展する、そのきっかけの位置に置かれているこの歌が、冒頭三首とほぼ同内容の独詠歌として詠み出されていることは重要である。この物語のひとつの主題をなしている女君と男君の関係が、単に男君の好色のみによって結ばれたものではなく、「かいばみ」の結果「なべて世の」という独詠歌を聞き女君のありのままの心情を知った男君が、その心情を女君といわば共有することによって、はじめて具体的に

とり結ばれた関係であることが、このような構成によって明瞭に示されていると考えられるからである。独詠歌として詠まれながら結果的に二人の関係を切り開く役割を果たしているこの歌は、冒頭三首に示された主題を主人公二人の関係へと展開してゆくために、つまりは孤独な独詠歌の世界を二人の贈答や唱和の世界へと広げてゆくために、物語作者によってことさらにこのように配置された、きわめて意図的な一首ではなかったかと考えられるのである。

事実、この「なべて世の」の歌の後、独詠歌は物語中からしばらく姿を消す。次の五首目の独詠歌が見られるのは、巻之二の後半、清水詣での際の報復が語られた後である。三の君の夫であった蔵人少将が、男君の勧めによって、男君の妹である中の君と結婚することになり、そのための縫物を依頼された女君は、かつて中納言邸でみじめな暮らしをしていたころ、三の君の夫であった同じ蔵人少将のために無理やり縫物をさせられていたことを感慨深く思い起こし、「着る人の」の歌を独詠する。この歌それ自身はもとよりもはや不遇の述懐ではないが、かつての「憂き身」を思い出した一首であり、その意味で、これを不遇と無関係な一首と言いつけることはできない。回想という行為を介して、この歌は、冒頭の三首の独詠歌と深くかわりあっている。女君とともに読者もまた、この歌によって、三首の独詠歌を詠んだ頃の女君の不幸だった境遇を、女君の心情を通

して回想し、幸せな現状とかつての不遇の対照的なありかたを再確認することになる。この五首目の独詠歌も、おそらくはそのような効果をねらって、作者によって意図的にここにこのような形で置かれていたものと考えられる。この一首についても、さきの歌と同じような、物語作者の意図的な構成意識の存在がうかがわれるのである。

残る六首目の独詠歌は三の君によって詠まれたものであり、これについては後述するが、女君によって詠まれた以上の五首の独詠歌を見るかぎりでは、落窪物語の作者は、和歌の配置についてもかなりの心配りを見せているように見うけられる。落窪物語の構成意識については、最初に女君が受けた虐待の内容と、後で男君によってなされる報復のひとつひとつの内容が、きわめて綿密に対応していることなどがすでに指摘されている（小山利彦氏「落窪物語」の構造―報復譚と出世譚を軸に―）『論集中古文学2・初期物語文学の意識』昭和五四年五月など）が、これら五首の独詠歌の配置をめぐっても、それと同じように、きわめて明瞭な構成意識の存在が、以上のように推測されるのである。

三

「なべて世の」という四首目の独詠歌を契機に女君と男君の関係

が成立してから、三条邸占拠によって報復が完了し鏡の箱に添えられた和歌が贈られるに至るまでの長い間、物語に掲出されている約三十五首の歌は、かつての不遇時代を回想した女君の五首目の独詠歌の中に含みつつ、そのほとんどが、女君と男君の二人の間でとりかわされた贈答歌か、二人で一首の歌を合作した連歌形式のやりとりに限られている。和歌のみに視野を限って言えば、この間、主人公たちは二人だけの世界で心を通い合わせており、他の第三者がそこに介入する余地はほとんどなかったということになる。二人の主人公以外の人物が歌の作者や贈答の相手として顔を見せるのは、その間、わずかに次の四首にすぎない。

①（典薬助から女君へ）

老木ぞと人は見るともいかでなほ花咲き出でて君に見なれむ

②（女君に代わってあこぎから典薬助へ）

枯れ果てて今はかぎりの老木にはいつかうれしき花は咲くべき

③（面白の駒から四の君へ、実は男君の作）

世の人の今日のけさには恋すとか聞きしにたがふ心地こそすれ

④（四の君に代わって北の方から面白の駒へ）

老いの世に恋もし知らぬ人はさぞ今日のけさをも思ひ分かれじ
一見して了解されるように、右の四首は、北の方のさしがねによって典薬助が女君に迫った事件と、男君のたくらみによって面白の

駒が四の君と結ばれた事件の叙述の中にそれぞれ一対ずつ示されている、合計二組の贈答歌である。この典葉助の一件と面白の駒の一件が、虐待と報復のそれぞれ一つの要素としてさまざまな点で互いに対比的に構成されていることは、小山利彦氏の前掲論文にもくわしく指摘されているが、主人公二人以外の人物が関係する例外的な贈答歌が、このようにこれらの部分にのみ一組ずつ示されているという点においても、これら二つの事件の記述は対照的になされていると言つてよい。しかも、神尾暢子氏前掲論文にもすでに指摘されているように、贈歌を贈った典葉助と面白の駒がどちらも当の相手本人から返歌を受け取ることができず、代理人から手きびしい歌を返されて贈答が実質的には失敗に終わっているという点でも、これら二組の贈答歌のあり方はよく似ているのである。

しかしながらこれら二組の例外歌にあつてもなお、その贈答の相手として、ないしは歌の実作者として、男君か女君かのどちらかが、常にどこにかかわつてはいた。これらの例外をも含めて、報復完了までの落窪物語中の和歌は、かならず主人公のどちらかとかかわりを持って詠み出され、物語中に示されている。そのような中にあつて、主人公の二人がまったく関与しない形で歌が詠まれたり示されたりしているのはじめての例が、本論冒頭で問題にした、三の君と四の君の唱和だったのである。

主人公以外の人物が身の上の不幸を述べ懐するというこの異例な唱和歌の問題にはやく注目した篠原昭二氏は前掲論文の中で、これについて、「この唱和の主題は運命の変転である。つまり、物語が人々の立場の逆転を語るとき、説明の一環としてこの姉妹の嘆きを歌によつて描写しているわけである。いいかえれば姉妹が運命の変転を嘆くことによつて、主人公の幸運を物語っているのである」と説明され、このような、主人公と異なつた場で詠まれた和歌も、結局は主人公の「幸運」を物語るはたらしきをしていることを強調された。たしかに、「人のうへと昔は見しを」「うきことの淵瀬に変はる世の中は」の両首で、三の君と四の君の二人が「運命の転変」を嘆いていることは一読してあきらかである。また、それだけではなく、現在の三の君・四の君の身の上とかつての女君の身の上を具体的に比較してみても、両者の間にはかなりの対照性が見られ、ここにもやはり作者の巧みな構成意識の存在がうかがわれる。すなわち、歌の前の会話文で三の君がおもに嘆き恥じているのは、自分の侍女たちが引き抜かれて今は女君に仕えているということであつたが、かつて物語の冒頭部で北の方は、女君の「うしろみ」として「片時離れず」仕えていたあこぎを、無理やり三の君の侍女として奪い取り、その結果女君とあこぎは「心のどかに物語りもせず」という状態に追い込まれていた。一方の四の君は、面白の駒との一件で出家の意

志を持ったもののすぐに子供が生まれたために尼になることもままならず、耐えながら暮らさざるを得ない自分の不幸を嘆くのだが、やはり物語の冒頭部で女君は、尼になっても虐待を逃れられない身の上を嘆き、ただ「消え失せなむわざもがな」とひたすら死を願うほかなかったのであつた。二人が今嘆いている身の上の不幸は、多少の相違は見られるものの、このようにそのほとんどがそのまま、かつては「人のうへ」すなわち女君の身の上にあつた不幸だつたのである。

だが、これをただ「運命の変転」の「説明の一環」として見るだけでは、この唱和がほかならぬ和歌という形を取つてことさらにここに示されているということの意味を、積極的に説明することができない。この二人の慨嘆は、なぜこのように和歌を伴つた形で語られなければならないか。

本論の冒頭でも注意したように、この二人の慨嘆の部分は唱和歌によつて歌物語のようにしめくくられているが、それはまたこの落窪物語の中では、独詠歌にはほぼ限つて見られた特徴でもあつた。身の上の慨嘆というその内容からも、また物語内のこのような叙述の形からも、この兩首の和歌は、唱和歌の形を取つてはいるものの、実質的にはむしろ独詠歌にきわめて近い性質を持っていると言わねばならない。物語冒頭部で女君は、身の上の不幸を述懐して三首の

独詠歌を詠んだが、その女君の不幸が運命の変転によつて自分たちのものとなつたいま、冒頭の女君の独詠歌に対応するかのように、三の君と四の君は、独詠歌とほとんど変わるところのない和歌を唱和し、身の不幸を嘆いているのである。かつて冒頭部で読者は、三首の独詠歌によつて主人公の不遇の嘆きを自分自身の心情のように受け止め、それによつて物語に引き込まれていったのだが、いま読者は、男君による報復が完了し、その結果、かつての女君の嘆きとはほほ同様の嘆きを今度は三の君と四の君が嘆いていることを、この二首の唱和歌によつて知ることになる。どんな報復が行われても、相手が外面的に苦境におちいるだけではかならずしも真の報復が行われたことにはならない。二首の唱和歌は物語冒頭の独詠歌に呼応するものとして、登場人物の心情のレベルでも報復が完了し、不遇の嘆きがいまや逆転して三の君と四の君のものとなつたことを、散文とは別の回路によつて読者に告げているのである。まずはそのためにこそ、三の君と四の君の二人は、ここで身の上を嘆く和歌を唱和しなければならなかつたと考えられるのである。

これ以後の物語の展開はしばらくさておき、いま、これまでの虐待と報復の部分に限つて考えれば、虐待を語る部分の冒頭に掲げられていた三首の独詠歌に対応して報復部の末尾に二首の唱和歌が置かれ、報復がいまや完全に完了したことが、ほかならぬその歌によ

つて明示されていた。このように、主人公に敵対ないしは対立する立場にあつた人物の嘆きの歌が物語の結末部に置かれるという構成それ自体は、他の物語にもしばしば見出されるところである。たとえば宇津保物語のただこそその巻の末尾近くには、この巻の主人公ただこそを謀略を用いて出奔に追いやり、やがてその真相を知つただこそその父の橘千蔭によつて見捨てられた一条殿北の方の詠嘆の独詠歌が次のように、この巻の最後の和歌として掲げられている。

北の方、「なほざりなる御心かな。なほいみじきものは女の身なりけり。かう思ひ果てられぬるにこそはあめれ。かくおもはさむ人は、よろづのこと思ふともかひもあらじ」とて、

白露に色変はりゆく秋萩をたままくずもかひなかりけり
とてゐ給へり。

主人公を虐待し、その結果みずから不幸な身の上に陥つた人物の詠嘆の独詠歌が物語の結末部に示されるという形は、この他、稲賀敬二氏によつて『新古典文学大系・落窪物語・住吉物語』に翻刻されている野坂家蔵住吉物語などにも、次のように見られる。

大納言のありし北の方の、なりゆき給ふ果てぞあはれなる。人にもものを思はせし報ひにや、大納言にも捨て果てられ、とひ来る人もなし。家はさんさんに破れ、板間漏りくる夜の雨、身を知れとてのをとづれも、ひとしほ涙をぞ催しける。添ひて語ら

唱和の位置

ふものとは、むくつけき女ばかりぞありける。あぢきなさの
まま、かくなむ、

宿荒れてまがきは野辺の小萩原朝たつ鹿もここに鳴くなり
となむ、ながめて明かさせ給へば、とひ来るものとは、空行
く月の影ばかりなりければ、またかくなむ、

世の中に心長きは久方をつくるよもなき夜の月影

野坂家蔵住吉物語にはこのあとに、継母が実子の三の君・中の君に贈つた歌一首と継母の死後に三の君・中の君が詠んだ歌が示されているが、それらについてはここでは省略し、いまはただ右に掲げた継母の独詠歌にのみ注目するにとどめておく。これらの例では、主人公に対立する、いわば憎まれ役の登場人物の末路がその人物自身の嘆きの歌の形で示されることによつて、物語が終末を迎えている。落窪物語の場合、歌を詠む三の君と四の君はかならずしも憎まれ役とは言いきれない人物でもあり、そこに宇津保物語などの若干の相違が見られはするものの、その点を除けば、主人公に対立する人物の詠嘆の独詠歌によつて物語が終末を迎えるという形はすべてに共通している。いくつかの物語に共通して見られるこのような形態もまた、ひとつの「物語の型」であると言つてよい。

三の君と四の君の唱和歌は、身の上を嘆く独詠歌に準じる歌として、物語冒頭の女君の三首の独詠歌に対応し、報復の完了を登場人

物の心情のレベルで示すためにまずはそこに掲げられていた。一方、主人公に對立して不幸におちいった人物の詠嘆の歌が結末部に置かれるという構成は、他のいくつかの物語にも共通して見られる一般的な形でもあった。三の君と四の君の唱和歌は、そのような「物語の型」にのつとる形で示されてもいたと考えられる。問題の唱和歌はかくして、たまたまそこに掲げられていたのではなく、そのような和歌が置かれるべき所に、すなわち虐待に対する報復が完了し物語の内容がひとまず終結をむかえるこの部分に、置かれるべくして置かれていると考えられるのである。

四

しかしながら、さきに同種の結末構成の例として挙げた宇津保物語のただこそその巻や野坂家蔵住吉物語が、文字どおりその結末部ではほぼ終わっているのと異なり、落窪物語の場合、三の君と四の君の唱和歌で終わっているのは報復の部分だけであって、物語そのものはさらに報恩や償いの部分へと続いている。この唱和歌の部分で語られているのも、三の君と四の君の末路や最期などではけつしてなく、この二人の人物は、この後も物語中に、むしろこれまで以上に頻繁に登場し続けるのである。それまでの物語のひとまずの終結を示していると考えられた三の君と四の君の唱和歌は、それでは、そ

れ以後もさらに続いてゆく物語の展開に對してはどのようなにかかり、物語の流れの中でどのような位置を占めているのだろうか。

篠原昭二氏は前掲論文の中で、「面白馬との結婚によって悲嘆に沈む四の君の歌」が物語中のその場面に掲げられていないことについて、「少なくともこの時点では四の君の悲嘆の感情が強調され描写さる（「される」か）必要がないからで、彼女が主人公ではないからにはかならない」と説明を加えておられるが、いまこの論理を裏返して準用すれば、三の君と四の君は、その独詠歌のような内容の唱和歌が物語に掲出されることによって、少なくともその部分では、「悲嘆の感情が強調され描写」されるべき物語の主人公としての扱いを受けていた、ということになる。また網谷厚子氏は、物語中に示された独詠歌に「登場人物を、次に展開する物語の主要人物として読者に印象づける機能」があることを、宇津保物語の和歌を手がかりに指摘された（『平安朝文学の構造と解釈』第五節第二章・平成四年十二月、初出『解釈』昭和五九年三月）が、いま問題にしている三の君と四の君の歌についても、同様の事情は同じようにあてはまるはずである。すなわち、三の君と四の君の唱和歌は、これ以降の物語の展開の中で、この三の君と四の君の二人が、これまでとはちがって、主人公に準じるような人物として待遇され描写されることがあることを、あらかじめ読者に印象づけるはたらきを

有してもいる、ということになる。

事実、この二人の唱和歌の後、物語中の和歌の様相は大きな変化を見せる。これまで、女君の独詠歌と典葉助・面白の駒にかかわる例外的な二組の贈答歌、そして唱和歌の直前の場面で鏡の箱に添えられて贈られた歌以外には、和歌の作者も相手も前述のようにすべて女君と男君の二人に限られており、それ以外の種類の歌は物語中に掲げられることがなかったのに対し、この唱和歌の詠まれた翌朝の場面に、女君から四の君へ贈られてきた歌がさっそくに掲げられているのははじめ、これ以後、物語中の和歌の作者や贈答の相手は一変して多様化し、さまざまな人物をめぐる和歌が、さまざまな形で物語に示されることになる。これまではひたすら、女君と男君の側から物語を見て来た読者の前に、さまざまな人物のさまざまな心情が和歌の形で示され、それによって、物語世界を見る読者の目は、必然的に複眼的な視点を取らざるを得なくなるのである。

たとえば、さきに列挙して検討した物語中の独詠歌のうち、最後に挙げた第六首目の「思ひ出づや」の歌は、女君と男君が女君の父中納言のために行った法華八講の際にもとの夫を目にした三の君によって「人知れずうち泣きて」口ずさまれたものであった。三の君と蔵人少将の破局は、本来は男君によって報復の一環として画策されたものであったが、ここに至っては、もはや男君は場面に何のかわりも持っていない。物語の主人公である女君や男君とは無縁なところで、かつて自分を捨てた夫の姿を久方ぶりに目にしたひとり

の女性の物語が、その女性の嘆きを通して、ここでは語られているのである。そしてやがて、法華八講の華麗な様子がひとしきり描写されたあと、三の君をめぐるこの物語の後日談が、「三の君、中納言を今日や今日やと思ひ出で給ふに、さもあらでやみぬ。いみじう心憂しと思ひ出づる魂や行きてそそのかしけむ」という言葉を導入部として、再び語られ続けてゆくことになる。すなわち、法華八講終了後、退出しようとしたもとの蔵人少将（いまの中納言）は、三の君の存在をふと思ひ出して「いにしへにたがはぬ君が宿見れば恋しきことも変はらざりけり」という歌を贈りはするのだが、それに対する三の君の返事を聞こうという態度も見せず、そのまま早々に退出してしまつた、というのである。

かつて物語冒頭部で詠まれた女君の三首の独詠歌は、その三首目の歌の直後に付けられた「心なぐさめに、いとかひなし」という記述のとおり、独詠歌であるかぎりはどこまでも空しい、ただ一人きりのつぶやきにすぎなかったが、第四首目の独詠歌が男君に聞かれたことを契機に、それらの独詠の世界は二人の世界へと発展し、それによって女君の嘆きは解消へとむかうことになった。それに対して、三の君によって「人しれず言は」れたこの第六首目の独詠歌は、

みのりある心の交流をついに。こまでももたらすことがない。三の君の、もはやいやされる可能性のない孤独を、読者はこれらの歌を通して実感せざるを得ないのである。

三の君はこの後、女君と男君によって中宮の御匣殿にとりたてられ、かつて受けた報復の償いをそれなりに受けることになるが、第六首目の独詠歌とそれをめぐる物語を読んだ読者は、この御匣殿就任によって三の君が十全な心の幸せを得ることができたとは、もはや考えることができない。すべてが女君と男君を中心に回転し、彼等主人公の立場から、彼等の力によってすべてを動かすことができな世界は、もはやここにはない。三の君が抱え込んだ不幸は、もはや女君・男君も容易に手を触れることのできない、ひとつの独立した不幸として描き出されてしまっているのである。三の君は、すくなくともこれらの部分に関して言えば、いまや一人の主人公として描き出されていると言ってもよい。そして、その事情は、女君・男君の仲介によって「筑紫の帥」との再婚の道を選ぶことになる四の君についても、ほぼ同様に指摘することができるのである。

物語冒頭の女君の三首の独詠歌に対応して、物語のひとまずの結末を示していた三の君と四の君の唱和歌は、また反面、これまであちら側に追いやられていた人物たちをこちら側の世界へと呼び入れることによって、さまざま人物のさまざまなことがらをさまざま

な視点から語ってゆく、そのような、これまでとは違ったあらたな物語をつむぎだしてゆく、発端の役割を果たしてもいたのであった。